

りれ一随筆 ⑦

弘前大学医療技術短期大学部専攻科

宮本昭子

開業助産婦として第2のスタートをした前回の松江喜美代さんとは、助産婦学校のクラスメートとして共に学んだ仲でした。

昨年の10月「まつえ助産院」を開業し、地域での活動を始めたとの知らせを受け、一度訪ねようと思っていたところ、丁度電話があり今回のボタンを受けることになりました。

懐かしさもあり、原稿はさておいて、私は彼女の助産院を訪ねました。場所は青森市内、堤川という川の端に位置し、交通の便利が良い所で明るい建物でした。

助産婦が大好きで、家庭と仕事を両立させながら施設助産婦として経験を重ね、そして今、目標を達成した彼女は、開業の準備や、独立してからの活動状況をイキイキと話してくれました。また地域の助産婦として、若い母親の育児相談にのったり、思春期相談など、これから自分のできる範囲のことをしていく、と抱負を聞かせてくれました。

核家族が増え、住宅事情も家族環境も変わって母子の指導の分野が広く求められていることを認識させられた、松江さんのお話でした。今後とも地域の母子の健康管理に向けて頑張ってください。応援しています。

教師としてのとまどい

現在、私は母校で助産婦の教育に携わって14年になりますが、教員になったのは母校が短大専攻科になった2年目でした。

助産婦学校を卒業後、臨床では業務に慣れることに夢中で過ごし、自己研鑽のないままに教育に携ることになり、今までよくやってこれたな、とつくづく感じています。それには当時の新道幸恵先生、今もお世話になっている西野加代子先生や私の周囲の方々の支援があったからなのだと、感謝しつつ仕事をしています。

短大での助産婦教育は1年間で行なわれてい

ますが、学生はこの1年で助産や母子保健の専門科目を講義・演習で学び、それを基礎にして臨床の場で体験学習をし、実践力を身につけなければなりません。そのため知識面だけではなく、技術面も大切な課題の1つとなり、学生は多くの実習に加えて、個人研究・グループ研究もあり、ハードな学生生活を送ることになります。

当時、臨床から教育現場に入った私は、このようなカリキュラムのなかで学生に「教育する」という認識の不足、自分自身の能力不足を感じながら「自分にできることは何だろう」と悩み、試行錯誤をしながら実習指導をしていました。学生指導というよりは、自分自身が学習を課せられた新米教師でした。先輩の両先生が講義・実習・研究と、時間を惜しまず学生を指導しているのをみて、教育者としての姿勢を教えられるという状態でした。

基本的な技術を演習した後とはいえ、母子の生命に関与する分娩の実習では、学生は不安と緊張感が強くなり、思いがけない行動をしたり、逆に手がだせなかったり、戸惑うことが多く十分な経験ができないこともありました。

しかし、教える側の私はそうした学生の不安・緊張を最小限にしてやることができただろうか。「失敗しないように」と側でハラハ

学生とかわり つなげて

ラしたり、学生についてまわったりしていた未熟な指導者でした。自分が、学生にどの程度の“援助”をすればよいのか、どうすれば“理解”してくれるのか、アドバイスができず、自分の立場を忘れて手を出してしまうこともありました。今にして思えば自分に余裕がなかったと言えます。その頃を思うとまさに、学生と私の「追いかっこ」的な関わりでした。

そんな頼りない教官ぶりでしたが、学生はいろいろな人とふれあい、分娩助産・新生児・妊婦のケアを通して「母子の安全を守る」ことの責任感を学び、「生命誕生のすばらしさ」に感激し、学生自身の力で多くの気づきをしてくれます。それは共に私自身の学びでした。

その当時の学生はこんな私を「お姉さん」とか「お母さん」と呼んでいたようです。私としては親しみをこめてのこととよい方に解釈していますが、教官らしくなかったということなのかもしれません。しかし、この頃の学生との関わりは忘れられない思い出となっています。

看護の心を教えていきたい

助産婦の道を選び入学してくる学生の動機は、ひと昔前の学生も今も大きく変わってはいません。「人生の出発点に立ち合える喜びがある」「生命誕生の場に接し感動的」「責任ある仕

事でやりがいがある」などであり、看護職の中では、喜びの場面に接する仕事であるからなのでしょう。

助産婦学生は母子の専門性を極めようと、実習に対し意欲をもっています。しかし実習では、年齢も生活環境も違うさまざまな妊婦に出会います。そして妊婦とのコミュニケーションに悩んだり、保健指導はよく聞いてくれるが行動してくれない、などの現実に触れ、ひとつの壁を越えるのに苦心しています。また、分娩にそなえて補助動作を指導したら「お産したことない人にわからないでしょう」と受入れられなかった、と自信をなくすこともあります。こんな例は実習の初期に聞かれるものです。それは技術の未熟さだったのか、言葉が足りなかったのか、その時の学生の関わりをみて援助するようにしています。

そんな中で未熟ながら一生懸命に看護している学生を、妊婦さんは、自分のことを気にかけてくれる、細かい指導をしてくれるから助かった、苦しい時側にいてくれ心強かったなどと感謝してくれます。そうした言葉を聞くと、学生が良い看護をしているなど、ホッとします。

助産婦の業務として助産はどうしても欠くことのできないものであるため、とかく技術を優先しがちになる傾向にあるように思います。「看護の心」を忘れず相手の気持ちを考えて行動し、人間として信頼関係を保つことの大切さを、教えていきたいものです。

* * *

次号は、いわき市にお住まいの伊藤かずみさんに、バトンタッチいたします。彼女は当専攻科の非常勤講師をし、その後秋田市内のマタニティセンターで活躍していた、助産婦の仕事を愛するママさんです。経験豊かな楽しいお話を聞かせてくれるでしょう。よろしく願います。